
特に意味はない。

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特に意味はない。

【Nコード】

N5042V

【作者名】

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

【あらすじ】

本当に本当に何も無い。

（前書き）

最近東方とすーぱーそに子にはまっています

（内容には全く関係ありません）

追記：直しました。勘違いを防ぐために念のため言っておきます。
エンドレスエイトの類ではありません。

「このヒマワリ、綺麗よね」

私は園芸部だ。花が好きだから。

ヒマワリの雄大さが好きだ、百合の凛々しさが好きだ、パンジーのさりげなさが好きだ、ボタンの可憐さが好きだ。花の香りが好きだ、花の何も飾らず、ひっそりとそびえているところが好きだ。土手の壁に咲いたタンポポなどを見るととてもなく愛おしくなってくる。花の飾らなさが好きだ。アサガオの花びらに朝露がついていた光景はうつすらと興奮を覚えたくらいだ。

「ああ、その花が咲くことは、季節的に校庭のアジサイが完全に枯れちゃう頃ですね。俺、あの花好きだったのに」

夏休みというだけあって自由参加だ。現在、午後一時の時点では私とちよいち喋りかけてくる男子しかない。静寂が嫌いなんだろうか、私の独り言に対して色々反応している。……花に喋りかけてるのに。そんな気持ちを心に押し留めて上辺だけ取り繕った。

「ああ、あれ綺麗だったよね」

私は男子が邪魔に思えてきた。

折角、花と一緒にいるんだから、いちいち喋りかけてこなくてもいいのに。

そんな私の心中を察したのか、何かもつと別の理由があったのか知らないが、彼は自分の世界に入り込んでいった。

私はプランターの雑草を抜いている。彼はハサミを取り出し、自分の花を少し切り取ったり剪定している。私はその姿を見て、少し苛立ちを覚えた。

彼の持つハサミが、錆び付いていたことだ。

花を切るのは部の規則的にも私的にも構わないと思う。だが、その道具の管理は最低限やってほしい。錆びついたハサミで選定すると切り口に錆が付いて病気になりやすく、切花や押し花にするにし

ても錆の影響で変色したり、結果あまり美しいものではなくなってしまう。

苛立ちながら、それを抑えるように雑草をぷちぷちと筆る。口に出したりはしないし、出すつもりもない。やっぱり高校の園芸部なんてこんなものなのかな。

雑草をむしっていたらいつの間にか三時になっていた。トイレにでも行こうかな。と腰を上げたとき、また彼が話しかけてきた。

「花って、綺麗ですよ。生を失ってからこそ、その綺麗さに磨きがかかる」

何を言ってるんだコイツは。と心のなかで突っ込みつつ、適当に答えを返す。

「こそ」？ 生きている時があるこそ、その後の美しさがあるんじゃないのかな？」

「いや、どうしても自分、生きてるものが好きになれなくて……。でも、切花とか押し花とかドライフラワーとかは好きなんですよね」自嘲気味に彼は言ったが、私はちっとも笑えなかった。自分と目の前に居る彼が同じだったから。自分がこんなにおかしい存在だとありありと思い知らされたから。

だけど、彼のその考え方には関わる必要はない、関わる気もない。どう転んでも彼のためになるとは思えないから。

「あ、そうだ」

一拍おいて、彼は思い出したかのように切り出した。

「そうそう、紫陽花の色を変えたとき、部長の反応どうでしたか？……ちよつと怒ってませんでした？」

「ああ、一部だけ色変えして、若干デザイン面では変だったけど評判良かったって。なに？ 石灰でも撒いたの？」

「はい、ちよつとあるモノを地面に埋めました。青のアサガオが欲しかったので部長に無理言ったのですが、それほど迷惑かけなかったようですね。安心しました」

別にアンタの好みなんか聞いちゃおらんが。

とりあえずトイレへ行きたいので適当に話を切り上げ、用を足してくることにした。

トイレから戻ってくると、またさっきのように黙々と一人作業を続けていた。

午後四時。そろそろ家に帰って勉強するか。と荷物をまとめはじめると、その気配に気づいた彼は私に向かってあるものを差し出した。

「そうだ、これ、あげますよ。スノードロップの押し花で作った栞」
スノードロップとは、簡単に言うと某鼠アニメ会社の妖精がよく持つる花のランプみたいな形である。相変わらず栞なんだな。オマエは。」

「余ったんであげます。今日来た人に適当に渡そうと思って」

そもそも毎日私ぐらいしか着てないじゃないか。それとも私を狙ったのか？ ……まあ正直これ以上深い関係になるのはお断りだが。

「あ、ありがとう」

「花言葉は、希望、慰め、逆境の中の希望。……うわ、すごく的外れでしたね。すみません。」

「ああ、別に気にしないから。そんなの」

適当に笑ってごまかす。花言葉ぐらいなら私も知ってるっつもの。

相当ストレスもたまってきた。私はそいつから逃げるようにさっさと帰宅した。

夜、私は自分の読んでいた小説に栞を挟み、寝ようとしていた。ふと手の中にある栞を見ると、今日あの男子から貰った栞であった。スノードロップの幻想的な雰囲気壊さない色彩使いと、簡単な図形だがそこに温かみを感じる切り絵が上手に組み合わせられている。あまりいい奴には見えなかったが、センスは結構いい線いってるん

じゃないかと思う。

静かに栞をはさむと、電気を消した。

突然、インターホンが鳴った。

「こんな時間に誰だろう……？」

《スノードロップの花言葉：希望、慰め、絶望の中の希望。ただし相手に贈った場合は「あなたの死を望む」となる》

（後書き）

なんか人が死ぬ小説を別の部員が言ったとおり切ったらほのぼのしてきた。

……その部員すごい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5042v/>

特に意味はない。

2011年8月5日03時19分発行